

罪を犯した人との面接でみられる 「甘え」のアンビヴァレンス

小林 隆 児

Ambivalence of “Amae” in the Interview with
Persons Who Commit a Crime

Ryuji Kobayashi

はじめに

こんにちは。ご紹介いただきました小林です。私は精神科医です。これまでの私の臨床を振り返りますと、お会いした患者さんは、赤ちゃんから大人まで、お年寄りを除いて実に様々な年齢層の方々です。最初の頃は発達障害、それも主に自閉症を中心に診てきました。その後、次第に多様な精神病理を示す患者さんにお会いする中で、発達障害臨床で培ってきた経験をもとに、いろいろと考えるようになりました。次第に関心は広がり、今ではあらゆる心の病理とされるものの成り立ちとその治療に関心は移ってきたように思います。そんな中で今考えていることをお話してみたいと思います。

本日のテーマを考える上で私には強く記憶に残っている印象的な経験があります。すでに時効になるくらい昔のことですので、最初にそのことについて述べてみたいと思います。

昔、福岡にいた時に精神科医のある友人から相談を受けたことを思い出しました。ちょっと診てほしい人がいる、というのです。友人が言うには、社会的には立派な職業人だが、大変な事件（高額の詐欺事件）を起こした人がいるので、診てくれないかとの依頼でした。友人の話を知ると、発達そのものに問題

があるのではないかと、今風に言えば発達障害を疑っているようでした。

詐欺事件を起こした人との面接を通して感じたこと

ある事件を起こした人との面接から

友人は彼のことを学生時代からよく知っていて、その様子を次のように話してくれました。

個人的にも仲が良かったので、下宿にもよく行っていたが、部屋の中は雑然としていて片付けられておらず、台所からトイレまで不潔な状態だったといいます。性格はくだけたところもあって、付き合いやすかった。スポーツも野球が上手くて、ピッチャーをやるほどだった。しかし、その後も長年付き合いがあるが、友人同士で語り合ったという実感をもった経験は皆無だといいます。食事やその後の二次会にも付き合いはいたが、クラブに行って女の子と話したり、カラオケで歌ったりしている時でも、ひとり彼だけそばでいつの間にか寝てしまっているということが多かったそうです。自分の気持ちを友人に語るということは、思い出してみると、まったく思い浮かばないともいいます。それでも彼の仕事は順調で、顧客もついていたそうです。ただ身近に見ていて気になったこととして、金銭欲が無い、財布をよく落とす、電車を間違える、タクシーを使って福岡から長崎まで行くようなことを平気でやってしまう、約束にはとてもルーズだったといいます。奥さんの話では、真面目な話をしようとする、すぐに寝てしまうそうです。結婚する前の見合いの席で、食事中に寝てしまい、奥さんの父親が怒ったことさえあったそうです。

私は気軽なつもりで引き受け、一時間ほど友人の職場の一室で面接をしました。まず自己紹介して、このような形でお会いすることになった経緯を説明しました。彼は特に抵抗を示すこともなく、了解してくれました。すぐに今回の経緯を尋ねながら話を聞いていきました。私の方からいろいろと尋ねるまでもなく、彼は自分の方から今回の事件に至る経緯を淡々と、第三者のように、他人事のように話し続けました。話の内容は理路整然としていて淀みもありません。

私は初対面ですし、事情が事情ですから、あまり慣れ慣れしくはできないな、と思いながらしばらく彼の話の黙って聞いていました。彼の話の聞いているうちに、これはいかん、このままでは1時間でも2時間でも、ずっとこんな調子で話が続き、面接も終わってしまうのではないかと思い、どう割って入ろうかと考えずにはおれなくなりました。

面接開始直後に垣間見えた変化

事件の内容そのものは深刻なものですし、恐らく彼の人生の今後を考えると、非常に厳しい現実が待っていることは容易に想像できましたから、彼も今となっては後悔の念や辛い思いを感じているのであろうと思いました。

そのようなことを考えた時に私にとっても印象深く思えたのは、彼が話し始めた時にかすかに生じた変化でした。彼は私と会うなりなら抵抗なく自分から話し始めたのですが、その際ほんの一瞬でしたが、彼の気持ちに動揺が生じたのでしょう。彼の視線が宙に舞い、感極まったのか、目頭が熱くなったのです。私はおやと思ったのですが、瞬時に起こったこの変化はすっと奥に引込んでしまい、何事もなかったような表情に戻りました。その後は淡々とした口調での話が続きました。私はこの変化をその場では取り上げることはせず、しばらく黙って話を聞いていく中で、彼の幼少期のことについて話題を振ることにしました。

犯罪者の生育史からうかがわれる幼少期体験

幼少期の記憶

「あなたは小さかった頃、お母さんからどんなふうに言われました？」と尋ねると、「いつも違ったことばかりやっている、変わった子だったと言われていた」と即座に返答が返ってきました。次いで「小さい時から他人とは違ったことをよくして、変わり者だった」こと、「小中学生の時、他人の笑いをとるために、人に受けることをよくやっていた」とまで話してくれました。芸達者でお笑いをとることに長けていたというのです。このように昔の自分につ

いて次々に自発的に話をしてくれることに私は驚きを感じながら聞いていました。

私の友人の話では、彼は何らかの家庭の事情で祖父母の手で育てられたようです。その他にもいろいろと気になる話が友人の口から語られました。何でも気軽に人の物を借りる、人の愛用している物を平気で使う、返そうという気はさらさらしない、でも自分の物にしようというよりも、そのまま忘れてしまっているようだといいます。

面接での心理的距離のとり方

この人との面接を行って最も印象的だと思ったのは、先にも述べたように、自分が語る際に、まったく感情を表に出さず、首尾一貫して冷静に語っていることでした。表立っては今の自分の気持ちの動揺を見せることもありませんでした。自分の行ったことに対して常に一定の距離を持って語っているということです。そこには何か自分の語りたくないことを意図的に隠しているという構えも多少は混じっているでしょうが、それよりもいつも他者に対して、大切な事柄に対して、一定の距離を取るというスタンスが特徴的な人ではないかと思ったのです。そのことを裏付けるエピソードはいくらでもあります。人付き合いの場、公的な場は勿論のこと、私的な場でも自分を語ることはありません。話が親密な、情緒的なものになっていけばいくほど、話に加わることなく、いつの間にか寝てしまうほどでした。情緒的に触れ合うような関係になりそうになると、途端に回避的な態度を取っているということなのでしょう。

彼のこのような対人的構えの起源がどこにあるかを考える上で参考になるのが彼の生い立ちでした。「小さい時から他人とは違ったことをよくしていた。変わり者だった」といいますし、彼自身の口からも「小中学生の時、他人の笑いをとるために人に受けることをよくやっていた」ことが語られています。

親密な人間関係の回避と現実感覚の乏しさ

このような生育史から伺われるのは、幼少期から一貫して対人関係において、他者と何かを共有するというような親密な人間関係を避け続けていたことです

が、さらに興味深いのは、芸を通して他者の注目を浴びることには熱心であったというところに、彼なりの自尊感情を高めるための言動を見て取ることができることです。

その根っこには、なんらかの家庭の事情で母親ではなく祖父母の手による養育を受けた体験が関係しているであろうことは容易に想像できます。つまり彼には「甘え」体験の欠如があったのでしょうか。そのことが現実の対人関係に対していつも回避的な構えを取らせることにつながったのでしょうか。そのことはアクチュアルな感覚、つまりは自分が生きているという実感を持つことを困難にさせますので、結果的に「現実感覚」を身に付けることを困難にしていったのではないかと想像されるのです。

なぜ犯罪にまで至ったのか

友人から犯罪に至るまでの彼の仕事ぶりなどを聞いていく中で、私が推測したのは次のようなことでした。仕事の能力は人並み以上にあるが、日常的に処理しなければならない細かな業務をついつい後回しにするようにして回避し、自分の関心の強いことにばかり精力を費やすという仕事ぶりだったとありますが、そうした中で次第に金の融通がきかなくなり、その場しのぎの嘘を積み重ねていったようです。その結果、次第に追い詰められていったのではないかとことです。仕事にも他人にもきちんと向き合えない、そんな人間関係の基本的なことが、このような深刻な事態を招いた根っこにあったのではないかと思われました。

罪を犯した人の対人的構えを「発達」という視点から考える

これまでの彼の特徴を聞いていくと、精神科医でなくてもアスペルガー症候群を想像したくなるほどですが、私はここで彼の診断を検討するのではなく、彼にみられた対人関係の取り方を「発達」という視点から考えてみたいと思います。

昨今、成人の発達障害がさかんに取り沙汰されるようになってきました。成

人になっても独特な対人関係の取り方を示し、コミュニケーションのどこか肝心なところに欠落があるような人々を、大人の発達障害として捉えようとする動きが目立ちます。そこで考えられている発達障害なる概念の基本には、脳障害が想定されていることが大半で、コミュニケーションの難しさについても、その基盤に何らかの脳障害が考えられているといいでしょう。

今日、発達障害に対する一般的な理解は、「なんらかの生来的な中枢神経系の成熟の問題（impairment）があり、成長・発達過程で、それを基盤にした様々な能力障害（disability）が発現し、その結果、日常生活に多様な生活困難（handicap）が生まれる」ものとされています。

発達障害の人たちを理解する際に、その基盤に脳障害を想定するという考え方に私がついていけないのは、彼らにみられるコミュニケーションの問題、対人関係の問題を、脳の障害という「個」の問題に起因すると考えるところにあります。そこに決定的に欠けているのは「発達」という視点です。もちろん、難聴のように明確な中枢神経系に基礎障害を認めるものもありますが、ここではそのようなものは除いて考えています。

「発達」という現象を理解する上で大切なこと

「発達」という現象は、ヒトが生まれて以後、常に養育者を中心とした大人の人々との濃密な交流を通して「人」となるというプロセス（過程）そのものを指します。そこで大切なことは、そのプロセスで親子、とりわけ母子間でどのような営みが行われているのか、その内実を見て行くことがまずもって私たちに求められていることです。そのことの検討無くして、一足飛びに脳の障害を想定するのは、本来の科学的態度とはいえないでしょう。乳幼児期早期の歪んだ体験や経験が脳の成熟過程そのものを歪め、結果的に脳に何らかの非可逆的な障害をもたらすことは、動物実験の世界ではよく知られています。

したがって、乳幼児期に親子関係の中で何が起きたのか、そこで乳幼児はどのような経験をしたのかをまずはみていかなくはなりません。さらには、そのことがその後の成長過程で対人関係にどのような影響を及ぼすのか。このようなことを考える中で、発達障害によくみられる症状や障害（とされているもの）

を理解していく。そのような姿勢が必要だと思うのです。発達障害に対する支援の本来のあり方は、そのような理解があって初めて切り開かれていくものでしょう。そのように考えていくと、現在よくいわれている「発達障害の障害特性を理解した支援」の「障害特性」という考え方に私は大いなる疑問を持っています。このような発想の背景には「個」の病理があり、それが非可逆的なものゆえ、それを前提に考えなければならないという考え方が潜んでいると思われるからです。

「関係」の問題は私たち関与する者を抜きに考えることはできない

ついで強調したいのは、発達障害が問題視されるようになった最も大きな理由はその対人関係のおかしさ、コミュニケーションの歪みなど、「関係」にまつわる問題だということです。「関係」を問題とするからには、素朴に考えても「個」の問題に帰せることには無理があることは誰にでもわかることです。コミュニケーションの問題を考える際には、相手の言動のみならず、私たち自身の言動をも念頭に置き、相互間でどのような現象が起こっているのか、そのことを捉えなくてはなりません。そのためには、両者間で起こっていることを、言語的次元は勿論のこと、非言語的な次元をも含めて検討していくことが必要になります。

「甘え」とアタッチメント

私はこれまで乳幼児期早期の母子関係に問題をもつ子どもたちとその養育者を多数診てきましたが、そこにどのような関係の問題が生まれているかを一貫して観察してきました。その中でもっとも大切だと思っていることは、「アタッチメント」にまつわる問題です。いまやアタッチメントは、虐待臨床は勿論のこと発達障害臨床においても強調されるようになってきました。ただ残念なことに、attachmentという用語は、「くっつく attach」という原義が示しているように、行動次元の視点でなおかつ子どもの側の視点に立っています。そこには「関係」の視点が欠落しています。私たち日本人にとって「アタッチメント」といわれる現象は「甘え」にまつわる現象ですから、「甘え」という視点で捉

えると、そこに「関係」という視点が自ずから生まれてきます。なぜなら「甘え」は相手があって初めて叶うものだからです。「甘え」は相手次第だということです。相手との関係の中で「甘え」を検討しなければ、「甘え」の実態を把握することは困難です。さらに「甘え」の視点のもつ重要な意義は、アタッチメントが行動次元の現象記述であるのに対して、「甘え」は当事者（母子）双方の情緒のありようを意味しているということにあります。

「甘え」の視点の大切さ

こころの問題を考える上で最も大切なことは、当事者の気持ちのありようをみていくことです。情緒のありようを意味する「甘え」の視点の大切さは言わずもがなです。さらに「甘え」にまつわるこころの動きは、非言語的次元のコミュニケーション世界ですから、その世界を捉える上で、「甘え」の視点は大きな武器になります。「甘え」の世界を感受する能力がわれわれ日本人のDNAには組み込まれているであろうことを考えると、「甘え」の視点が乳幼児期早期の母子関係を論じる上で大きな力となることが期待されるのです。

日本には、古来より「甘え」にまつわるデリケートな感情を表現する言葉が多々あるのはそのためです。接近したいという欲求や感情であり、慈しむことで親自身も「甘え」を味わっているということが出来ます。そういう情緒的な関係を大事にし、慈しんできたという歴史があることを私たちは大切にしたいものです。

乳児期にみられる母子関係の難しさ

生後6カ月くらいから、子どもの「甘え」は誰の目にも見えてくるようになります。私が相談を受けるのは、「甘え」の関係がうまくいかないという事例が大半です。子どもが母親になつかない。なついてくれない。そのため母親は子どもにどう接してよいか分からない。そんな母子関係での相談です。そのような母子を丁寧に見て行くと、そこに共通した特徴があることに気がきます。

その特徴の要点は、「母子が遠く離れていると、子どもも甘えるような行動を取るのですが、いざ母親が子どもに近づいて相手をしようとする、なぜか

途端に背を向けたり、視線をそらしたりする。抱っこしようとする、仰け反って嫌がる。そのため母親が好きにしないといふと放置すると、再び相手をしてほしいような行動を示す」というものです。

母親が子どもに接近すると、子どもは母親から離れる。しかし、いざ離れると寂しいのか、再び相手をして欲しいような態度をとるといふわけです。そういう関係の難しさはすでに乳児の段階で起きているのです。

「関係」をみることの大切さ

このような乳幼児期の母子関係の難しさを知ってからは、常に「関係」という視点を念頭に置きながら臨床で出会う人たちとの面接を心がけてきました。それはどういうことかといふと、相手（患者）と私との「関係」ではどのようなことが起こっているのかを第三者的な視点から捉えるとともに、自分の内面にどのような感情が起こってきたのか、相手はどのような反応を示しているのか、こうした多角的な側面から面接での二者関係のありようを観察していくように努めることです。このような経験を積み重ねるにつれて、これまでにない面接の捉え方ができるようになってきました。そして、そこでどのようなことが大切なのか、それをどのように活かすことが治療的なことなのか、を考えてきたように思います。

そのようにみていくと、先に述べたような関係の特徴は、何も自閉症とかアスペルガー症候群とか、発達障害とかいわれる人たちだけではなく、もう少し長じて、学童期や思春期、あるいは成人期の多彩な精神的問題を抱えている事例の面接においても、そうした関係の特徴を共通したパターンとして捉えることができるようになりました。冒頭の事例の面接での特徴として取り上げたことも、このような経験に基づいています。

では犯罪者との面接で捉えられる特徴とは何か、もう少し議論を深めるために、もっと身近な事例を取り上げてみましょう。

私自身は、いわゆる罪を犯した人との面接をさほど多くは経験していませんが、行動障害といわれる人たちとは数多く接してきました。彼らの行動障害とされる行動には、器物破壊、他害といわれる他者への激しい暴力行為などが少

なくありませんから、その意味では似通った性質の問題を持つものといえるでしょう。反社会的行動という意味では同質の問題を持っている人たちだということですから。

犯罪者との面接で大切なこと

ある性的犯罪者との面接から

ここでは行動障碍の事例ではなく、知的障碍や発達障碍を持つ成人の人たちの通っている施設で会ったある男性についてお話してみようと思います。

現在 30 歳台後半の男性で、軽度の知的障碍があります。がっちりした体格で、強面のする顔で、私が最初に会った時はやや斜に構え、警戒的な様子でした。

彼の主たる問題はとてもデリケートなものでした。痴漢や盗撮、トイレの覗き見（その対象は、若い女性のならず、高齢者にまで及ぶ）性的いたづらなどをしていて大問題となっていました。

送迎バスの中で、女性のお尻を触った時には「車の振動でつい手が当たった」などと妙な屁理屈を言いますし、作業をしている女性に背後から抱きかかえるようにして乳房を触った時に、職員から注意されたら、「彼女が危ないことをしているので、大丈夫かなと思って手を出した」などと下手な言い訳をします。

さらには施設に通う若い女性をレイプして妊娠させてしまう事件まで起こしていました。そんな性的犯罪（なのですが、刑事事件として取り上げられてはいませんでした）を繰り返していたのです。そんな状態ですからどこも引き受け手がいません。そのためもあって、今の施設で面倒を見ているというのですが、彼をどう理解したら良いか困っているので、面接をしてほしいというのが私への依頼でした。

生育歴からわかったこと

彼の生い立ちは悲惨なものです。生まれて間もない頃、両親は離婚し、父親は蒸発。母親も養育能力に欠けていたため、2歳で養護施設に入れられました。

当時の経過はよくわかっていませんが、彼の話によると、物心がついた頃から、施設で彼だけが冷遇されたと言います。実際はどうであれば、彼自身はこの施設で楽しかった思い出はなかったと言いますから、みんなから阻害されていたと彼自身が感じていたのは確かでしょう。

小学校に入学してから学力低下といじめの体験も手伝って、高学年になると、特殊（今でいう特別支援）学級に入りました。中学校では養護（今でいう特別支援）学校へ行っています。

彼は学校で次第に反抗的態度が目立つようになり、八つ当たりからか器物破壊や周囲の者に対して暴力を繰り返していたそうです。しかし、職業能力は、養護学校で一般就労できるくらいの力はあったそうです。そのため養護学校高等部を卒業後、寮生活をしながら一般就労できるまでになりました。しかし、職場で遅刻をする、上司の指示に従わないなどの反抗的態度が問題となり、まもなく解雇されます。

成人になってからの経過

その後、しばらくある成人入所施設に入っていたのですが、そこも期限切れで退所となります。暴力が問題となってグループホームには入れてもらえず、居場所がない状態で、ずっと期限付きの施設を転々とする状態でした。今はなんとかグループホームに入ることができて、今の施設のデイサービスで世話を受けています。

彼の問題は深刻なものですから、同じ施設内に通う利用者の親御さんたちは自分の子どもたちに被害が及ばないかとても心配しています。スタッフは、他の利用者を保護しなくてはいけないし、彼に対しても支援しなければなりません。そのため今は彼のためだけの別室を用意して、作業をさせています。そんな状況で、私は彼と面接することになりました。

最初の面接での印象

最初に会った時の印象はよく記憶していますが、激しい行動障害を呈した人たちに会った時ととてもよく似たものでした。一言で言うと一種の凄味のよ

うなものを感じさせました。近寄りがたい独特の雰囲気です。私の方がいつやられるかわからない、そんな感じを受けるほどでしたので、私は内心少々緊張していました。私がこのような印象を受けたのは、恐らく彼の方こそこちらに非常に強い警戒心を持っていたからなのだろうと思います。

彼と会ったのは施設のみんなから隔離された小さな部屋です。彼は座って簡単な手作業を続けていました。私は何から話そうかと戸惑いながら、まずは作業の内容について彼に尋ねることにしました。彼は私の質問に嫌がらずに答えてくれました。ただ話し方はややぶっきらぼうで、仕方ないから答えてやるという態度でした。私はついつい彼の機嫌を取るような態度になっていきました。

話題が盛り上がるのを回避する

彼がどんな話題に興味を示すのか、私の知っている限りの芸能情報を駆使しながら探っていったのですが、あまり話に乗ってくれません。話の中で、サッカーが好きだということがわかったので、Jリーグの選手を話題にしていくと、彼はひと昔前に活躍した選手を挙げます。今活躍している選手の名前は出てきません。それを不思議に思いましたが、彼は自分のよく知っていることを訊かれると、とても得意げに、自慢げに話し続けます。そこで私が彼に同調するようにして話題を盛り上げようと積極的に話に入っていくと、途端にその話題から離れて、他の話題に移ってしまいます。それがあまりにも唐突な感じでした。自分が知らないことを教えてもらい、その逆に相手の知らないことを教えてやるようにして、お互いの理解が深まり、話題が盛り上がっていく、そんな関係になることを殊更避けているような感じを受けました。その時、私は「これはなんかあるな」と感じました。

触れられたくないことから思わず回避する

そのあとにもいろいろな話をしていきましたが、そろそろ核心に少し触れなくてはと思って、あなたはなぜこんなところで作業をしているのか、訊いてみました。すると彼は、「いや、みんなと一緒にだとイライラするので、ここがいいのです」と自分に都合の良い理由をこじつけて話します。でも彼の手は小刻み

に震えていましたし、その時には急に落ち着かなくなっていました。私の目には明らかに気持ちの動揺を見て取ることができました。視線も定まらなくなったので、この件についての質問はその辺で終わることにしました。

この初回の面接では、ちょっとしたやり取りしかなかったのですが、いろいろと感じるところがありました。私の方が話を盛り上げるために相手に同調しようとする、彼はそれを避けるように話題を変えてしまいます。さらに彼の心のなかの一番触れられたくないところに、私が触れようすると、彼は動揺し、なんとかごまかそうとしていました。日頃の彼の対人的構えがとてもよく出ているなど思いました。1回目はそれで終わりました。

2回目の面接で

1カ月後に、2回目の面接をしました。前回もそうでしたが、私がいに行っても、作業の手を休めず、私に対して半身の構えを取り続けていました。話し方も終始淡々とした口調です。前回と同様、仕方なく付き合っている、そういう態度を感じさせました。

私はこの時まで彼の印象は、喜怒哀楽の感情が欠如した（昔風にいえば情性欠如といいますが）プシコバート（精神病質者）を連想させるものがありました。

このときも前半は彼の関心事に合わせて話題を選びましたが、そのような話をしている限り、彼は心を開かず、感情閉鎖的で、常に私から一歩引いている感じが続いていました。そのためでしょうか、私も話をしていて少しも楽しめず、彼に対して肯定的な感情が起りません。後半になって彼の生い立ちについて前回の続きを訊いていくことにしました。

小学校高学年からのいじめの体験、幼少期の施設でのいじめ体験などに話が及んでいきました。さらには両親への恨みにも話が広がっていきました。しかし、彼はいたって淡々とした口調で話し続けました。私はただ聞き役に徹するしか術はないと思い、あまり質問を挟むことなく、黙って聞いていました。そんな時の彼は私に対して斜に構え、強がった態度が印象的でした。

終わりに近づいた時の私に対する態度の突然の変化

面接時間は1時間ほどだったので、そろそろ終わりに近づきました。私は「そろそろ時間だから終わろうかね。何か話しておきたいことがあるかね」と伝えました。すると、驚いたことに彼の態度が突然変わったのです。それは私にとって予期せぬ反応でした。それまでは感情を交えず、自分はこれまでひどい育ちを受けてきた、いじめられてきた、などと淡々と話していたのですが、終わりを告げた途端に、彼は優等生のようになり、やや哀願口調で、次のようなことを話し始めたのです。

「もう少し、親が自分の面倒をみてくれたら、こんなダメ人間にはならなかった。仕事も頑張れた」「こんな俺にしたのは親のせいだ」「自分は彼女ができて結婚するなら、彼女の両親を大切にしたい」などと言い始めたのです。自分もその気になってやろうと思えばやれるのだ、と主張したかったのでしょうか。

ここでの彼の態度の変化を面接の1時間の全体の流れの中で捉えなおしてみると、次のような変化を意味していることに気がきます。

相互の動きの変化のゲシュタルト

面接の前半から終盤にかけて、私は彼の話になんとか合わせようとしていろいろ思いを巡らしながら懸命に彼の話聞いていました。その時、彼はずっと作業の手を休めることなく、私に対して半身の姿勢で斜に構えて応じていました。彼は私に対してどこか一步身を引いた状態で話をしていたのですが、面接が終わりに近づいたので、私の方が彼から身を引こうとしたのです。するとその途端に、彼は私に対して自分から相手を求めるように身を乗り出して相手の気を引くようなことを話し始めたのです。

ここでの二者関係の相互の動きのゲシュタルトを描き出すと、「相手が自分の方に近づこうとすると身を引くが、逆に相手が身を引こうとすると自分から近づこうとする」と表現することができます。そんな関係の特徴がこの時の彼の反応から見て取ることができると思うのです。

乳幼児期の母子臨床からみた「甘え」のアンビヴァレンス

母子治療の経験から

このような彼の態度の急変には重要な意味が隠されていると、私は直観しました。その時私の脳裏に浮かんでいたのは、乳幼児を対象に母子ユニット(MIU)で行った母子治療での経験でした。乳幼児期早期の母子関係に深刻な問題をもつ事例を沢山見てきた中で、その関係の難しさは、けっして子どもが自閉的だなどと単純に言えるようなものではなく、相手との関係の中で子どもがデリケートに反応しているところに問題の核心があるということを実感してきました。その特徴は次のように表現することができます。

「母子ふたりでいて、母親が関わろうとすると子どもは回避的の反応を示すが、いざ母親がいなくなると子どもは心細い反応を示す。しかし、母親が戻ってきて関わろうとすると先ほどと同じように回避的の反応を示す」

その結果、二人の間で交流は生まれず、いつまでたっても楽しい関係にはならないのです。

同じようなことが乳児にも見られます。

9カ月の乳児でしたが、母親のそばでむずかっっていました。どうも抱っこをせがんでいるように見えました。母親はそれに応えて抱きかかえようとします。しかし、母親が抱きかかえた途端に、嫌がるように仰け反って降りようとするのです。母親が仕方なく降ろしてやりました。すると再びむずかり始めたのです。

「甘えたくても甘えられない」心のありようのゲシュタルト

私はこのような子どもの母親に対する関わりを通して、そこに子どもの母親に対する「甘えたくても甘えられない」心理と同じところの動き(ゲシュタルト)を見て取りました。

子どもにみられる対人関係の問題を、子ども自身の問題として捉えるのではなく、関係の問題としてみていくことによって、初めて指摘できたことです。

「関係」という視点で捉えるということは、子どものみに着目するのではなく、子どもの動きを周りの人たちとの関わりの中で捉えていくことです。常に全体の流れを読み取りながら、その中での子どもの動きの意味を考えていかなければなりません。そのためには私たち関わる側のこころの動きをも常にモニタリングしていることが大切になります。

終わりに近づくと活発に遊び始める

ひとつ、分かりやすい例を取り上げてみましょう。これは拙著『自閉症のこころをみつめる』（岩崎学術出版社、2010）で取り上げている4才0カ月の男児に対して行った母子治療の初回にみられた子どもの反応です。

母子と治療者が一緒になって1時間遊ぶセッションでのことでした。母親が熱心に遊びに誘えば誘うほど子どもは母親から避けるようにして離れてひとりで遊ぼうとします。一緒に遊んで楽しむことがまったくといっていいほどできません。そろそろ終わりの時間がきたので、私が母親に終わりを告げ、みんなで片付けを始めようとした時です。子どもは急に遊戯室の中央に出てきて、ひとりではしゃぎ始めたのです。

周りの大人たちが子どもと積極的に関わって遊ぼうとすると、子どもは常に回避的態度を取っているのですが、大人たちが終わりに近づいたので引こうとした途端に、子どもは逆に積極的に遊ぼうとし始めたのです。

乳幼児期早期の関係の問題が再現される

ここにも乳幼児期早期の母子関係の難しさの特徴と同じ子どものこころの動き（ゲシュタルト）を見て取ることができます。すでにお気づきのことだと思いますが、私が先に述べた男性との面接で捉えた特徴もこれと同じ性質の反応だということです。

私がただ黙って聞く側にいると、彼はいろいろと話します。しかし、こちらが少しでも親密そうに熱く話し始めると、途端に逃げるように話題を変えていく。こちらが面接の終わりを告げて別れようとする、彼の方から近づき、私の気を引くような話をし始めるのです。

彼が私との間で取ったこのような対人的構えは、乳幼児期早期に親子の間で実際に体験したものだとして、すぐに私は気付きました。それが現在、私との関係において再現されているのだということです。

「関係からみた甘えのアンビヴァレンス」

このような親子関係の特徴が、私のこれまで取り組んできた発達障碍の親子に共通して認められることがわかってきました。それを私は最近「関係からみた甘えのアンビヴァレンス」と言うようにしています。

どうしてこのような関係が生まれるのか、そのことが私の最大の関心事のひとつでもあるのですが、ここで強調しておきたいことは、このような乳児期から認められる独特な親子関係の難しさは、その後の生涯発達を通して、その人の対人関係の取り方の基本に脈々と生き続けるということです。どのような年齢層のどのような病理を示す患者との面接においても、このような関係の問題が様々な形で姿を現わしてくるものなのです。

私が本日取り上げてきた具体例で、関係のむずかしさ、関係の取り方の特徴を描き出してきたのは、そのような理由に依っています。

先の彼との面接で認められた独特の関係の取り方も、まさにこうした特徴を示していると思うのです。そして、その起源は乳幼児期早期の親子関係にあることは間違いないだろうということです。

彼の変化にどう応じたか

先の面接の続きに話を戻します。

私はすぐに彼の優等生的な変化に対して、次のように受けて応じました。「おや、急に優等生になったね」と。私はその時、彼の変化に私へのある種の「甘え」に近い感情の動きを感じたのです。私の気持ちに嫌な感情は起こりませんでした。そうではなくて、彼のこれまでの人生経験がこのような形で現れているのだと思うと、彼の悲しみ、苦しみにも思いを寄せることができたように思います。私は彼の態度の変化を肯定的に受け止め、次の面接の約束をしてその回の面接を終えました。

「甘え」の体験が彼の対人的構えを変えた

1カ月後の3回目の面接で、彼の態度は大きく変わりました。

私も彼に対してそれまでのような身構えた態度は緩み、親近感を持てるようになっていました。そんな態度で前半は気軽に話していました。すると中盤に差し掛かったところで彼の態度が随分と変わってきたのです。私に対してきちんと面と向かって座り、作業の手を休め、私との話に集中するようになったのです。話し方もそれまでの淡々とした語り口調とは異なり、ときには生々しい感情を表現するまでになってきました。さらには自分の欠点や弱味まで正直に話すようになったのです。話題も最近のことに触れるようになりました。プロ野球のドラフト会議で巨人が一位希望の選手を取れなかったこと。これまでいい選手ばかり取ってきたから。あんな球団はだめだ、と大人の態度で私に対して対等というよりも説教口調で、優越感に浸って語っているように思えました。

しかし、その一方で「親の血が流れているので、自分の子どもができれば、同じように扱う（虐待する）のではないか」、「自分が女の子だったら父は自分を見捨てなかったのではないか」、「今までの人生は何だったのか、わけが分からない」と、本音と思われることまで語るのです。私はこれほどまでの変化に大変驚きながらも、自然体で話ができるようになりました。

その後、半年以上の面接を続け、今では外作業に従事しながら、安定した生活を送っています。

面接で「関係」をみるコツ

面接に臨むにあたって大切なこと

面接内で起こった彼のこれほどまでの変化は、私にとっていい意味で大きな驚きでしたが、なぜこのような劇的な変化が生じたのか、そのことを考えるために、私が面接の中で何を大切にしていたのか、振り返ってみたいと思います。

母子ユニットでの経験以来、私は面接において相手（患者）の話を聞く際に、話の内容にあまり囚われないようになったと思います。相手の話を聞いている時に、私自身の中にどのような感じ（フィーリング）が起こるのか、その感覚

を身体で感じ取り、それがなぜ起きているのか、そんなことを随分と意識するようになっていきます。面接とは相互交流の場ですが、そこでは言葉だけがやりとりされているわけではありません。互いにあまり意識することはないけれども、非言語的な交流が生まれています。この非言語的次元で起きていることに対して気付くように心がけているといってもいいでしょう。

相手との心理的・物理的距離の変化に敏感になる

その際、大切だと思っているのは、相手との物理的、心理的距離がどのように変化しているか、に気付くことです。このような距離の変化は、単なる距離の変化のみを反映しているのではないのです。そこには必ずといっていいほど当事者の気持ちの動きが反映されているものなのです。身体の動きの変化がその人のこころの動きを反映しているということでもあるのです。

このあたりのことは日本人であればよく理解できるのではないのでしょうか。「甘え」という感情の動きは、必ず相手（母親）への接近を同時にもたらしめます。子どもではとてもわかりやすいでしょうが、われわれ大人の場合であっても、相手が自分に近づけば、そこに「甘え」に近い感情の変化を感じるでしょう。「甘え」に対する恐怖心を持っている人であれば、少しでも物理的に相手との距離が縮まると、過敏に反応するものです。そのようなことは大人との面接でよく経験します。

原初的知覚、力動感の働き

このような感覚を磨くためにはどのようなことが大切なのでしょう。このような変化を感じ取ることができるのは、私たち自身の身体感覚に基づいています。私たちの身体をもってしか感じ取ることができない、そんな性質のものです。それをこれまで私は「原初的知覚」あるいは「力動感 vitality affects」と呼んできました。「甘え」にまつわる感覚を感じ取る際に、この原初的知覚が大きな力となります。初めて聞いた人には難しいように感じるかもしれませんが、私たちは常日頃から意識することなくやっていることなのです。そうであるにもかかわらず、なぜかそのことに大切さに気付く人はほとんどいないのが

不思議です。

自己理解が他者理解につながる

これまでの発達障害理解は、先にも述べたように、その人の障害特性を見極めることを重視し、それに沿った援助の方策を考えることが主流であったといえましょう。そこで語られている「障害特性」は、その人「個人」に内在する心理特性とされてきました。そこでの理解のありかたを見てみると、治療者や援助者の関わりのあるようは一切問われることなく、彼らはまるで黒子のような存在として語られてきました。しかし、発達障害の人たちとの関わりそのものを振り返ってみると、そこには援助する側の私たち自身も相手との間で動揺したり、恐怖心を抱いたり、怒りを感じたりと、生の感情が起こっているものです。そのことは相手との関係の中で生じていることで、当然相手も同じような体験をしているわけです。そのことは発達障害の人たちに見られる対人関係の問題を理解する上で、無視することのできない、それこそ核心に触れる重要な手掛かりとなるものなのです。

私が本日の講演でお示した事例の面接過程での重要な変化は、すべて私が相手との間で起こったことをアクチュアルに捉えたものです。それが相手のこちらの動きを理解する最大の手掛かりなのです。

「甘え」体験の欠如と病理的言動

乳幼児期早期に「甘え」をめぐる体験に深刻な問題を抱えたまま、成長してきた人たちにおいては、この「甘え」体験の欠如を補うために、あるいはその苦しみを防衛するために、様々な病理的言動を通して他者との関わりを継続しています。そうした彼らの言動は、私たちからみると、容易に付き合い難い、否定したくなるような、あるいは排除したくなるようなものになりやすいため、彼らと私たちとの関係はなかなか建設的な方向に向かわないのです。なぜなら彼らは「甘え」にまつわる体験を心地よいものとした体感したことがほとんどなく、「甘え」の感情が自分の中で起こることにさえ、恐怖を抱いているものなのです。誰からも触れられたくない、それほどまでの恐怖心や不快感を

抱いているものだと思うのです。そのことを私たち援助する側のものはよくよく理解した上で、彼らとの関わりを持つように心がけなくてはなりません。

表に現れた病理的言動に幻惑されないこと

それはどういうことかといえば、こちらに対して反抗的あるいは拒否的であったり、問題行動が前面に出ていたり、引きこもっていたりしているとしても、その表向きの言動に惑わされることなく、その背後に彼らにも「甘え」の感情、つまりは他者を求める気持ちがうごめいていることを忘れてはならないということです。最初の段階では表面的な言動に私たちも強く心を動かされて動揺し、どうしてもその言動を否定的に捉えて対処しがちになります。その際、大切なことは反社会的、非社会的な意味合いをもつ言動に対して頭ごなしに否定的態度で関わるのではなく、そのような言動を少しでも減らすような手立てを試みながらも、彼らの背後に動いている「甘え」にまつわる情動（気持ち）を感じ取っていくことが大切になります。

実はそうした心の動きをいかにして掴むか、その技を身につけることは、対人援助を主な生業とする臨床従事者には切実に求められていると私は考えています。

おわりに

最後に先の男性の援助に取り組んでいる施設職員から教えてもらった面白いエピソードがありましたので、それを紹介して話を終えたいと思います。

さきほど述べたように、彼は他の利用者たちとは離れたところで、一人で作業をしています。ある日、昼食を運搬してくれる職員が他の用事で遅くなってしまいました。その日の昼食はラーメンだったのですが、すでにラーメンは冷めてしまっていたのです。職員は温かいラーメンを作り直して持ってきてくれたのですが、彼は職員のそうした好意に対して、「ぼくは猫舌だから、冷たい方がよかったのに」と、かわいげのないことを言ったということです。この時職員はかちんときたと言います。一事が万事こういった態度を取るのです。相手

の好意を真正面から受けとめて、ありがとうと感謝の気持ちを伝え、それによって心地よい気持ちになるといった経験がないのでしょうか。逆に自分の好意も相手に素直に出せませんから、感謝してもらって心地よい気持ちになるといった経験もないのでしょうか。

相手と嬉しい感情を分かち合うような場面になり、自分の中に「甘え」の感情が起きると、何が起るかわからない、予期しない結果が起きると怖いから、そういう状況にならないように、すぐに自分の身を引いてしまう技を身につけてしまっている。そういう身体の反応が、結果的に、屁理屈を言い、嘘を言い、相手が困るような言動として反応してしまう、そんなことになっていると思うのです。

私たちが彼らのような人と付き合うとき、表向きの反応にいちいち目くじらを立て、そんなことを行ったりやったりしてはいけなく、このときはこうあるべきだ、こうあらねばならぬ、という頭でっかちな捉え方で支援しようとする、すぐに行き詰ります。そういう形でしか自分を出せなくなってしまった、過去の長い経験があるために、彼らは他者に対して大変に用心深くなっているのです。そうした歴史があることをまずもって理解していく必要があります。彼の歩みを振り返りながら、いまの言動の歴史的な意味を読み取っていかねばならないのです。

私たちがそうした背景を理解できるようになると、相手に対して多少なりとも余裕を持って対応できるようになります。すると彼らの些細な一挙手一投足の中に、私達との関係を求めているというサインを感じ取ることもできるようになるものです。彼らは私たちに対して大変に用心深くなっています。したがって私たちは、彼らの些細なこころの動きを敏感に察知し、さりげなく受けとめる。そういうことがとても大切になります。

そういうセンサーを日本人はもともと持っているのですね。私はよくビデオを学生に見せますが、その時はまだ臨床のこともよくわからないにもかかわらず、結構大事なところを感じ取っているものです。アタッチメント研究のような外国産の概念ばかりにとらわれなくて、日本固有の文化である「甘え」という観点から、もっとみていく必要があると私は強く感じています。

ではどうしたらそのような技が磨かれるのか、そのことについてはまたの機会にしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

本稿は、刑事施設を出所・出院した人々の地域生活を支援するために開催された「刑事施設退所後の地域生活支援に関する連続講座」（平成25年9月15日-16日、東京都墨田区生涯学習センター）においてゲスト講師として招かれた際の講演『罪を犯した人との面接で見えてきたもの—知的障害者のための通所施設での経験から—』の内容を加筆修正し、再構成の上改題したものである。

西南学院大学人間科学部社会福祉学科